

骨組織を合併する尿膜管腫瘍

京都大学医学部泌尿器科学教室

加藤 篤 二

URACHAL TUMOR WITH BONE FORMATION

Tokuji KATŌ

From the Department of Urology, Faculty of Medicine, Kyoto University

A 45-year-old man was seen with gross hematuria. Cystoscopy revealed a tumor at the dome of bladder. Partial cystectomy was performed. The tumor was adenocarcinoma (Fig. 1) and very interestingly associated with osseous tissue (Fig. 2).

緒 言

本症例は教室における尿膜管腫瘍の第1例で、かつて井上・松井の名のもとに簡単に報告されたものであるが、組織学的に興味のある所見が見られたので以下に記載する。

症 例

患者：45才 男子

初診：1935年11月25日

主訴：血尿

現症：1934年4月 過労後血尿をきたしたが、まもなく消失、同年12月再度血尿を認めたので某病院で膀胱鏡検査をうけたが、異常なしといわれた。1935年8月に高度の血尿をきたしたが、その他の症状は全くなかった。11月に本院泌尿器科に受診して腫瘍を発見された。

所見：体格中等度、腹部に異常なく、尿は茶褐色に混濁し、検鏡上白血球(+)、赤血球(卅)、膀胱鏡検査で膀胱頂部に小指頭大の乳頭状腫瘍を認め中央は潰瘍化する。その他粘膜に異常なく、両側尿管口よりの青排出は遅延している。腎盂撮影では両腎とも正常、入院後連日発熱をくり返し下熱とともに一時退院し、1936年1月13日再入院。PSPは総計53.5%。1月21日腫瘍の摘出手術を膀胱高位切開のもとに行なう。腫瘍は膀胱頂部の腹膜附着部に位置して鶏卵大の硬結をふれたが腸管と癒着もなく、それで腫瘍を含んだ膀胱の部分切除を行ない、これに接する腹膜も同時に切除して手術を終った。摘出腫瘍はひょうたん形で大部分

は膀胱外に突出し、逆に膀胱頂部内面では母指大の凸凹を示し中央が潰瘍化していた。

3月15日全治して退院。

摘出腫瘍の大きさは長径3.9×短径2.6×厚さ2.0cm、弾力性硬。

病理組織所見：多数の腺様構造が著明で腺細胞は核に異型度が強い(Fig. 1)。特異な点はFig. 2に見るように腫瘍に接した管腔を有する間質に骨組織の出現していることで、すなわち平行に走る骨梁と多くの骨腔を示す所見が認められた。

総 括

以上のように本例は定型的な尿膜管の腺癌であるが、その間質に骨組織を合併している点で特有である。膀胱自体は骨系と無関係であるから尿膜管腫瘍に含まれる骨は先天的にあったものか、または、後天的な骨化生が考えられる。文献上、尿膜管腫瘍はそれほどまれなものでなく、Begg以来内外では多くの報告がなされ、筆者の経験でも約10例を算するが、しかし同時に骨組織を合併したものは辻の統計でも見られないようである。

まず病因的に可能性のある後天的な化生とすれば如何。第一は間質の変性に石灰化が起こり、続いて化骨に至る機転であるが、本症例では石灰化像がほかに見られない。第二には尿路の壁における化骨でこの方面の権威である慶大の小林によるとその化骨の特徴は上皮にほとん

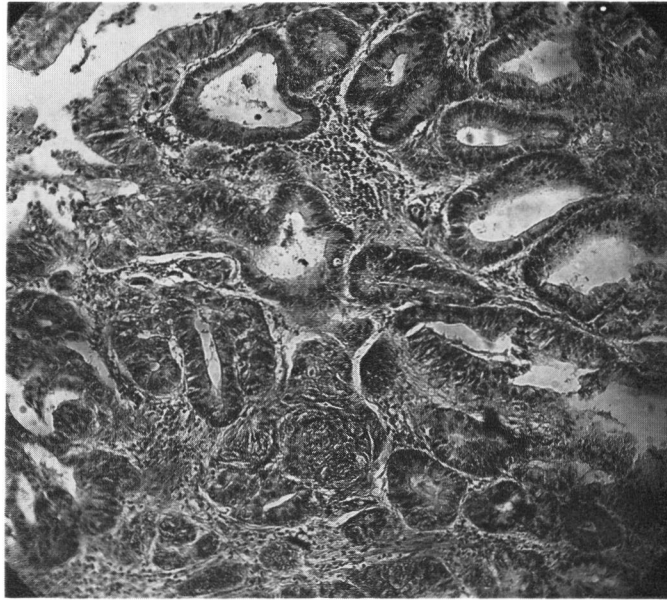


Fig. 1



Fig. 2

ど直接し骨組織が新生することで石灰沈着が先行しない。自然にはまれにしか見られないが、実験的な異所的骨形成の研究によれば膀胱粘膜を他部位に移植すると上皮に接した間質に骨の新生が認められるがこれには上皮の存在が必要でその変調によって間質から化生が起こったとみなすべきで誘導性化生 metaplasia due to induction ともいうべきものといわれる。膀胱癌に骨組織を伴った文献もまれに散見される点より本例もあるいはそのような粘膜の potency

によって尿管管内に発生したものかも知れない。ともあれまれな1例として記載した次第である。

文 献

- 1) 井上・松井：皮膚科紀要, 30 : 478, 1937.
- 2) 辻：尿管とその疾患, 南江堂, 1949.
- 3) 加藤・ほか：外科領域, 2 : 648, 1954.
- 4) 高橋：慶応医学, 34 : 409, 1957.
- 5) 小林：病理学総論鈴江・小林医学書院, 1960.
- 6) Damjanov, I. & Urbanke, A. : J. Urol., 101 : 863, 1969.

(1970年2月6日受付)